

琉球本と福建本：『二十四孝』 『童子撫談』 を例にして

陳, 正宏
復旦大学古籍整理研究所教授

<https://doi.org/10.15017/16509>

出版情報：中国文学論集. 38, pp.1-5, 2009-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

琉球本と福建本 —— 『二十四孝』 『童子摭談』 を例にして ——

陳 正 宏

みなさまこんにちは。

はじめに、このたびこの高名な九州大学にお招きいただき、中国文芸座談会に参加させていただく貴重な機会をご提供下さいました、静永健准教授に感謝申し上げます。

本日のテーマは、「琉球本と福建本 —— 『二十四孝』 『童子摭談』 を例にして ——」です。

昨年十月、私は鹿児島大学法文学部高津孝教授のお招きを受けて、慶応大学斯道文庫の派遣スタッフとして、三日間にわたる琉球本の調査のため沖縄を訪れました。

周知の通り、現在の沖縄諸島は一八七〇年代以前、琉球王国という名の島国として、東アジア地域ではよく知られた存在でした。琉球王国の歴史については、国際的に、特に日本国内において、すでに多くの研究成果があがっています。しかしながら今のところ、書誌学の視点から琉球王国で制作された書籍、とりわけ琉球本漢籍について研究したものは少ないようです。琉球本と中国福建地方の書籍とを関連付けて考察したものとすると、さらに少ないことでしょう。ですから私は本日この機会をお借りして、私の知識や見解をみなさまにご報告させていただきたいと思います。

今回私は、沖縄での調査の際に見た二部の琉球本漢籍を例に、琉球本と福建本の関係について検討してみたいと思います。二部の琉球本のうち、一部は一八七九年に琉球人によって抄写された『二十四孝』で、もう一部は一八四四年の琉球刻本『陳惕園先生童子摭談』です。どちらも石垣市立八重山博物館の所蔵品です。

『二十四孝』については、みなさまよくご存知のことと思います。先行研究では、その版本は大きく三つの系統に分けられるとされています。すなわち中国元以前に流行した二十四孝義図に基づいた『孝行録』の系統と元末の郭居敬『二十四孝詩選』系統、そして明代万曆以降の『日記故事』系統の三つです。三系統の版本に共通なのは、いずれにも二十四の古代中国の道徳的な説話が収録されていることです。異なるのは、最後に成立した『日記故事』系統では、名実違わず二十四話すべて孝行説話であるのに対し、それに先立つ『孝行録』と郭居敬『二十四孝詩選』系統には、兄弟間の友愛（所謂「悌」のことです）を主題にした説話も含まれているということです。『孝行録』と郭居敬『二十四孝詩選』の二系統間では、二十四の説話の主人公が一部異なるという違いがあります。

八重山博物館所蔵の琉球抄本『二十四孝』には、封面右側に琉球人抄写者による題署…「大清光緒五年己卯六月十日書之也。」があり、抄写年は一八七九年であることが知られます。所収の二十四孝の顔ぶれは『孝行録』とは異なり、のちの『日記故事』系統には見られない「張孝・張礼」と「田真・田広・田慶」という二組の兄弟の友愛説話が入っていることから、本書は郭居敬『二十四孝詩選』系統であるとほぼ断定できます。

続いて、琉球刻本『陳惕園先生童子撫談』について見てみましょう。これは中国清代の福建長樂の学者・陳庚煥（号惕園）が著した啓蒙書で、先に紹介した『二十四孝』と類似の、五言絶句形式で子供向けに道徳規範を説いた読み物です。首巻にある馬執宏という琉球の学者の序には、次のように記されています。道光十八年（一八三八）、琉球王国の使者である顔嘉行が中国に行き、福州で劉錫経という学者にどのような訓蒙書が琉球の児童教育に適しているかについて教えを乞うたところ、劉氏がこの本を数冊顔氏に贈りました。顔氏は琉球に戻ってから、琉球高官の協力を得て、道光二十四年（一八四四）、琉球でこの本を翻刻しました、と。

ご紹介した二種の琉球本漢籍には、注目すべき共通点が二つあります。

『二十四孝』の郭居敬系統本は十四世紀中国で成立しましたが、中国では十五世紀中葉以降流行せず、代わりに孝行説話のみを集めた『日記故事』系統本がおこりました。それに対し琉球王国では、郭居敬系統本は十九世紀後半期になっても伝写されていたことがわかっています。また『童子撫談』は割合新しい作品ですが、現代中国では比較的早期の単行本である道光十四年（一八三四）刻本は殆んど見られず、この作品自体までもが忘れ去られようと

しています。ところが今日の沖縄においては、本書の琉球翻刻本を所蔵する機関は一館にとどまらず、沖縄県立図書館と八重山博物館の二館あり、そのうち八重山博物館には同版本が二部所蔵されているということがわかったのです。これが一つめの共通点です。

二つめの共通点は、前述の二種類の書籍の中国原本がいずれも福建から出ているということです。『二十四孝』の郭居敬系統本の編者・郭居敬は福建尤溪の出身で、彼の『二十四孝詩選』は明代の地方志の記述に基づき、福建で編纂され完成したものです。『童子撫談』は先程述べた通り、福建長楽の学者・陳庚煥の著作ですが、その中国刊本もまた基本的にはすべて福建で出版されています。

中国本土では再び脚光を浴びることなく、もはや失われようとしてしまっている古書が、近隣諸国で保存されている例は、もちろん他にもあります。そうはいっても、二種類の琉球本の底本の成立時期が大きく異なり、形式的にも一方は写本、もう一方は印本という違いがあるにも関わらず、どちらも中国の福建地方と関係があるとなると、大いに興味をそそられます。

さらに注目すべきは、今回挙げた例は決して特殊なケースではないということです。事実、我々の琉球本調査でも、そこかしこに福建本の面影を認めることができました。例えば『小学句讀』と題された書物は、鹿児島大学の高津孝教授の考証によれば、底本が明代福建の学者の著作であるだけでなく、版木も福建の刻工に彫らせたものだという可能性があるそうです。文献にも、琉球・中国間の書籍の往来は、明代（十四世紀）すでにあったという記載があります。

球版（近思録）、屢引明（二統志）、丘琼山（家礼）、梅誕生（字彙）、乃似刻于明季者。盖其三十六姓本系閩人，朝貢往還，止閩動閩三歲。閩又有存留館，留館通事之從人，多秀才假名入閩以尋師者，或寓閩數年而後歸。日与閩人為友，故能知儒先之書，携歸另刊，旁附球字以便習。

これは清代乾隆年間に潘相が著した『琉球入学見聞録』巻二からの引用です。文中の「三十六姓本系閩人」とは、

明代洪武年間からたえず琉球に派遣されていた、三十六の姓氏をもつ福建出身の中国人移民のことを指します（「閩」は福建の略称です）。彼ら琉球で生活した中国人移民とその子孫は、中国に朝貢する機会に乗じて、琉球から最も近い福建に赴きました。あるいは琉球の通訳の付き添いにかこつけて福建に行き、先生について勉強したりもしました。彼らは一度につき数年間福建に滞在し、現地の書籍にもかかなり詳しくなっていたようですから、現地の書籍を琉球に持ち帰って翻刻したのも当然の成り行きといえるでしょう。

ここまでお話ししてきたところで、福建と琉球の地理的な位置関係と両者間の海路の距離についても触れておきましょう。一つ興味深い例をご紹介します。一八〇〇年、李鼎元という中国の使者が、清代嘉慶皇帝の命を受けて琉球を訪れました。彼はその年の旧暦五月七日に福州五虎門から船に乗って出発し、五日後那覇港に到着しています。それに対し彼が福州に戻った後、今度は陸路を通って首都北京に行き、嘉慶皇帝に琉球での成果を報告した時には、たとえ車馬を伴ったとしても、紫禁城を望むまでに一カ月以上はかかったと推測されます。

伝統的な東アジア世界において、地理的あるいは交通的要因によって引き起こされた特殊な文化交流の例を見ると、中国の有名な古語（日本の諺で言えば）「遠い親戚より、近くの他人」が想起されます。このため漢籍書誌学を研究するにあたっては、従来とは異なる新たな視点を取り入れる必要が出てくるのです。

ご存知のように、現在東アジア漢籍の研究はすでに国境を超えて、中日韓三国の学者の共通の関心を集める課題となっています。所謂「漢字文化圏」という考え方はすでに定着しています。この分野では静永健教授編纂の『漢籍と日本人』が、貴国の関連研究の中では出色の、代表的著作といえます。しかし書誌学の分野では、一歩進んでより具体的な視点から研究を深めていくために、この先できることはまだたくさんあるという気がします。そこで私が考えているのが、現代の国家という概念を取り払って歴史の本来あるべき姿に立ち返り、当時の地理や交通等の要素を十分考慮した上で、大きな交流圏をいくつかの小さな交流圏に分割することが一つの有効な手段となるのではないかと考えています。

具体的には、東アジア漢籍書誌学の大きな枠組みの中で、同時期の中国本、日本本、朝鮮本、越南本、琉球本など異なる国々の版本を、歴史的背景によってまず三つの類型に分けてみてはどうでしょうか。すると第一類は基礎

となる中国本、第二類は中国本の体裁を受け継ぎながら独自の形式を創造した日本本と朝鮮本、第三類は主に中国或いは日中両国の特定の地域の版本の影響を受けてできた越南本と琉球本、というように分類することができます。その上で第三類の漢籍書誌学の研究には、小交流圏の概念を取り入れるとよいと思います。

小交流圏の主な特徴は、距離的に近い、または交通の便が良いなどの理由で国家の枠を越えた交流があるということです。したがって東アジア漢籍書誌学においては、ある特定の小交流圏内の異なる国の漢籍版本同士の間が、同一国内の離れた地域の書籍の版本同士よりも似ているということがよくあるのです。

わかりやすい例を挙げましょう。越南本の線装はきわめて特殊で、後表紙の方から見ると、とじ糸の端が長く残してあるのがわかります。これはもともと越南本特有の現象であると考えられていました。しかし後になって、同じ現象が実は中国清代の雲南本の中にも見られるということがわかり、越南本の外観が清代の書籍のそれとよく似ているということは、今や誰もが知る史実となっています。

それと同様に、前述の琉球刻本『陳惕園先生童子摭談』の字体は典型的な中国唐代の柳公権体ですが、なぜこの字体が用いられたかについては、現存する琉球本の刊本が少ないため論理的に説明することができません。ところが福建本の影響を合わせて考慮すると、あっさり結論が出てしまいます。なぜなら福建本で宋代以来最も広く用いられた字体こそ、まさにこの柳体だからです。

このような研究を進めていけば、東アジア漢籍書誌学におけるあらゆる疑問に対し、徐々に明確な答えを出していくことができるでしょう。

以上で私の報告を終わります。不適切な点やお聞き苦しい点も多々あったことと存じますが、最後までご清聴いただきどうもありがとうございます。みなさまの忌憚のないご意見をぜひお聞かせ下さい。(鳥海 奈都子 訳)

〔編集者附記〕 この文章は、第二三九回中国文藝座談会(二〇〇九年一月二十四日)での講演原稿を陳正宏先生の許可を得て全文掲載したものである。当日もこのまま日本語で講演いただいた。